

## 自己を表現したくなる授業の創造 —教師に求められる授業力—

河辺 哲也\*・濱崎 美幸\*・荒瀬 淳子\*・網本 徳文\*・美作 健悟\*・濱野 愛華\*  
柳井 崇史\*・中村 好弘\*・大田 誠\*・田中 敬\*・横沼 潤一\*・徳光 和也\*  
田村 恵美\*・野崎 誠\*・津守 真治\*・山口 英司\*・津村 幸江\*・岡村 賢吾\*  
末富 真人\*・中村 匡宏\*・高菅 靖友\*・鹿島 由湖\*・山田 佳子\*・糸長 雅弘

To Create the Class in which students Attempt to Express Themselves  
—Teacher's competence in creating class —

KAWABE Tetsuya\*, HAMASAKI Yoshiyuki\*, ARASE Junko\*, AMIMOTO Naruhumi\*, MISAKU Kengo\*, Hamano Aika\*  
YANAI Takashi\*, NAKAMURA Yoshihiro\*, OTA Makoto\*, TANAKA Kei\*, YOKONUMA Junichi\*, TOKUMITSU Kazuya\*  
TAMURA Megumi\*, NOZAKI Makoto\*, TUMORI Shinji\*, YAMAGUCHI Eiji\*, TSUMURA Yukie\*, OKAMURA Kengo\*  
SUETOMI Masato\*, NAKAMURA Masahiro\*, TAKASUGA Yasutomo\*, KASHIMA Yuuko\*, YAMADA Yoshiko\*, ITONAGA Masahiro\*  
(Received January 15, 2008)

キーワード：意欲、表現したくなる、動機づけ、生きた授業技術

### 1. はじめに

中学校の学校生活の大半は、授業である。学校行事や朝の会、終わりの会も、授業の一環ととらえるならば、中学校は授業という「場」の連続の中で営まれていることになる。

それでは、授業とはどのような「場」なのか。

教師の立場でいえば、将来にわたって生きていくために必要となる力を生徒に身につけさせたいと願う場である。生徒の立場でいえば、「学ぶことは楽しい。」と感じる場である。つまり、授業とは、生徒が学ぶことの楽しさを体験しながら、力を身につけるところに他ならない。

よく「生徒の立場にたった授業が大切だ。」という言葉を目にする。しかし、生徒にとって、現在の私たちの授業は、「学ぶことの楽しさ」や「知的好奇心」を揺さぶられるような場に本当になっているのだろうか。あるいは、自分の感じ方や考えを表してみたいと思う場になっているのだろうか。自分たちの授業を振り返ったとき、もう一度、授業についてとらえ直す必要を感じたのである。

そこで、私たちは、研究主題を「自己を表現したくなる授業の創造」と設定し、教科の壁を乗り越え、前述の課題に対して共同で研究していくことにした。

### 2. なぜ「意欲」に着目したのか

現在、子どもたちの学力向上について、教育再生会議や中央教育審議会などを中心に、

---

\*山口大学教育学部附属山口中学校

議論されている。また、文部科学省は、平成19年の4月に行った全国学力・学習状況調査の具体的な数字から、学力の状況をつかもうとしている。【1】平成19年11月には、この調査結果を背景にしながら、「審議のまとめ」が中央教育審議会から発表された。「新学習指導要領」の骨子となる「審議のまとめ」の柱は、必修授業を重視し、授業時間を増やすことであった。【2】

これは、「ゆとり教育」の目玉であった「自ら学び 自ら考える力」の育成を、総合的な学習や選択教科の学習を柱にするのではなく、必修教科の学習の中で育てようとする立場の変更といえる。また、それを受けて、中央教育審議会は、「授業数の増加」だけでなく、「朝読書」・「ドリル学習」・「長期休業の短縮」などの取り組みを提案している。

しかし、このような枠組みを変えることで、本当に学力は身につくのだろうか。その枠組みばかりが着目され、授業そのものの在り方や学習を支える子どもたちの意欲が問われなくてよいのか、という危惧を私たちはもっている。

特に、子どもたちがこれから生きていくうえで、二つの意欲を育てることが重要だと考えている。

一つは、自ら対象に関わろうとし、その結果、自分の内部に感じたり考えたりしたことを、言葉など何らかの方法でとらえようとする意欲である。もう一つは、他者と関わり合う中で、自分の感じ方や考えを表し、確かにしようとする意欲である。この二つの意欲を、子どもたちの学習を支える重要な力だにとらえた。

しかし、この二つの意欲は、子どもたちの内面に潜在しているものである。外部からの働きかけがなければ、この意欲を引き出すことは難しい。そこで、「授業」という私たち教師の働きかけを契機に、この2つの意欲を引き出し、高めたいと考えた。

### 3. 「表現したくなる」の意味するところ

目の前の対象に関わろうとしたり、外部からの刺激があったりしたとき、私たちの内面に何らかの感じ方や考えが生まれる。軽重はあるが、自分にとって切実な思いは、とらえどころのない状態で内面に残る。このとらえどころのない「もやもやしたもの」を言葉や絵、音、動作のイメージなど何らかの形にして、自分なりにとらえようとする。

また、独立した「個」の存在である私たちは、自分の思いを表したり、他者の思いを聞いたりしながら、人とつながりたいと考えることもある。つまり、自分の思いを形作ること、そして、外部に表すことで他者とのつながりを作り出すという2つの点で、「表現」は深い意味をもっている。

しかし、思ったことや考えたことを的確に表すことは、そう簡単なことではない。

例えば、表現する手段の一つである「言葉」を例にとってみる。自分にとって「嬉しい」体験をする。しかし、その嬉しさは、「私は～ということがあって嬉しかった。」と話しても、自分の思いのわずかしか表せない。それは、言葉の世界と思いの世界とに距離があり、どれだけ自分の思いを言葉で表そうとしても、完全に表すことができない。ましてや、体験を表すための語彙が少なく、また、自意識が強くなる中学生には容易なことではない。

このような難しさを認めたくて、「自分の感じ方や考えを確かにつかみたい。」「その思いを他者にできるだけの確に表したい」と生徒が感じ、その感じたことを表現しようとする意欲を、授業の中で育てたいと考えた。

そこで、研究主題「自己を表現したくなる授業の創造—教師に求められる授業力」を掲げ、研究仮説を次のように設定した。

生徒が自分の感性や認識を「表現したくなる」場を、授業の中に意図的・継続的に仕組むことは、一人一人のよさを引き出し、他者と関わろうとする意欲を引き出すことになり、自分の学びに自信をもち、自ら考え、判断し、行動しようとする生徒を育てることができる。

自分の感じ方や考えを表すことは、容易なことではない。何度も吟味したり、確かめたりしながら、少しずつ形になっていくものである。このように考えるとき、言葉や動作などで外部へ表す前の「内的な表現活動」が大きな意味をもつと考えている。

「内的な表現活動」とは、心の中に起こった感じ方や考えを、言葉などにして確かめる活動だと私たちは考えている。つまり、うまく外部に表すことができなくても、生徒が感じたり考えたり、想像したりしたときに内面に生じる反応も「表現」ととらえているのである。

しかし、「表現する」という言葉では、このような考え方を言いあらわすことはできない。なぜなら、「表現する」という言葉は、外部へ表れたものが重要であるという立場を表すからである。つまり、「生徒の意欲や関心、他者との関わり」という視点をもったとき、「表現したくなる」という言葉でなければ、私たちの考えは表せない。それが、「表現したくなる」という研究主題の意味するところである。

すると、私たちの研究の軸は、生徒が表現したくなるためには、どのような働きかけをすればよいのかという、「動機づけの研究」ということになる。そして、その表現したくなる「動機づけ」をする場を「授業」に求めたのである。

#### 4. 研究の進め方

この研究は、次の三つのことを中心に進めている。

一つは、「表現」という意味を問い直すということである。各教科や養護から見て、「表現」をどのようにとらえるのか確かめる必要がある。

二つめは、「表現したくなる」教材は、どのような条件をもっているのか吟味し、整理することである。「考えてみたくなる」「試してみたくなる」、そのような教材の価値を考えてみる必要がある。

三つめは、「表現したくなる」場づくりや場面のしくみ方である。学級集団や教科集団、少人数集団など学習集団として「表現したくなる」場をどのようにつくっていくのかという「場づくり」がある。また、発問や授業の中での説明、指示、話し合い活動などどのような意図をもって、「表現したくなる場面をつくるか」という「場面づくり」も必要になる。

以上の三つを、研究の中心に置いている。

さて、今年度(H19年度)は、3年計画の2年次であった。昨年度は、「表現とは何か。」ということについて、とらえ直した。さらに、「自分」と「自己」、「表現する」と「表現したくなる」という考え方について整理した。

2年次となる今年度は、生徒が「自己を表現したくなる」には、どのような動機づけが

有効か、「教材」・「発問」・「場づくり」の三つの観点から確かめたいと考えた。

#### 4-1 教材と発問—「教材の価値を踏まえた発問づくり」

生徒の感性は、本質的なものや考えるだけの深さをもったものに敏感に反応すると私たちはとらえている。すると、生徒の内面に、「おもしろそうだ」「考えてみよう」「これはどういうことだろう」という興味や疑問をもたせることが大切となる。つまり、今までの自分の認識が揺さぶられ、「考えてみよう」という生徒の意欲を、教材が引き出すということである。これが、教材の大きな価値となってくる。

しかし、どんなに優れた教材でも、発問が工夫されなければ、その価値を十分に引き出すことはできない。発問は、教材の価値に子どもを気づかせるための糸口なのである。

例えば、一つの発問から、生徒の多様な反応を生み出すことができる。さらに、発問をとおして教材と生徒の関わりや教師と生徒や生徒同士の関わりが生まれることで、生徒の思考を深めさせていくことができるのである。

すると、授業では、生徒の多様な反応を引き出す発問と、生徒の思考を深めさせる発問が重要になる。

ある社会科の授業を例に考えてみたい。

この授業では「室町時代の特色に気づく」というねらいを、授業者はもっていた。ここで、生徒に「室町時代の特色として考えられることをあげてみよう。」と聞きたくなるところである。「考えられることを言わせる」ことは、自由に発言でき、生徒の反応が活発になるように思われる。

しかし、焦点が定まらず、生徒にとっては、「何を言ってよいかわからない」ということにも陥りやすい。しかも、「時代の特色」という尋ね方は漠然としている。

そこで授業者は、室町時代を文化という視点から切り込み、「金閣」と「銀閣」に目を向けさせた。そして、「なぜ金閣には金箔がはられ、銀閣には、銀箔が貼られていないのか。」と発問した。このような明確な問いをすることで、生徒の認識は揺さぶられ、自分の感じたことや考えを表したくなるのである。

さらに、室町時代前半と後半の文化の変容に着目させるために、「銀箔を貼れなかったのか。貼らなかったのか。」と発問した。そうすることで、幕府の状況だけでなく、文化を創り出す人間の意識の変容をとらえ、時代に対する考えを深めさせることができると考えたからである。

このように、「金閣」「銀閣」という2つの事象を関連させながら、室町時代の特色に気づかせたいという授業者のねらいは、「教師が教えたいことを生徒が考えたいことに変える」発問という形で具現化されたのである。

#### 4-2 場づくり—「受信することを大切に作る学級集団づくり」

生徒にとって、自分が所属する「場」がどのような性格のものか、あるいは、どのような雰囲気をもっているのかということは、表現というテーマを考えていくうえで重要な問題である。「自己を表現したくなる授業」づくりをするときに、表現したいものを生徒がもち、集団の中で発信することは大切である。しかし、それを受け止める側の問題は、さらに大きい。

「人の話を聞く」「人の歌声を聞く」「人の文章を読む」「人の動きを見る」など、自分が

発信したものを、他者はどのように受け止めるのか、あるいは、他者が発信したものを、自分はどのように受け止めるのかということは、「表現したくなる」動機と大きく関わっている。

例えば、「この集団は、自分の話を聞いてくれる」、「自分の作品をまじめに見てくれる」、「自分が取り組んでいる姿を認めてくれる」という支持的な雰囲気があれば、「自分の考えを表現してみよう」という思いが生まれやすい。その支持的風土をつくるには、受け手の考え方が重要となる。つまり、「『聞く』『見る』『読む』などをおして他者の感じ方や考えを知ることは、自分の中にないものとの出会いであり、だからこそ価値があり、おもしろい」という認識をもたせることが必要となるのである。

このように「自己を表現したくなる」という授業をつくっていくうえで、「学習集団」という土台がしっかりしていなければ、「表現したい」という意欲は生まれにくい。「こんなことを言ったら笑われるかも……」というような雰囲気があるところに「自己を表現したくなる授業」は成立しない。

表現することは、自分という姿を顕わにすることである。特に、自意識が過剰となるこの時期に、「表現してみたい」という意欲を育むためには、「お互いの感じ方や認識は違うということ。違うからこそ授業でその違いを確かめていくことに意味がある。」ということ、生徒が肌で感じる必要がある。そのためには、学級担任の日々の関わりや「道徳」「学級活動」の授業とともに、すべての教科教室や保健室の中で、「自分の認識を超えた世界が存在するかもしれない謙虚さ」を教師はもちろん、生徒自身ももつことが重要となる。

#### 4-3 私たちに求められる授業技術—授業力

授業とは、教師の願いにもとづいた意図的な営みである。「自己を表現したくなる授業の創造」とは、私たち自身に向けられた言葉である。それは、驚きや疑問など、生徒の内面に生まれたものを、思わず彼らが表したくなる「授業力」を求められるということである。

このような「自己を表現したくなる」授業をつくるうえで、私たちに必要とされる力は、大きく四つあると考えている。

一つは、教材を選ぶ力である。なぜこの教材か、この教材のどこに生徒が表現したくなる「深さ」があるのか、見抜く力が必要になる。この「深さ」は教材の本質といってもよい。そして、この「深さ」に出会わず手だてとして、発問やワークシート、話し合い、板書などが重要になってくる。

二つ目は、生徒の多様な反応を引き出す力である。教師の考えに生徒を誘導していく授業では、生徒の多様な反応は生まれにくい。教師のもっている答えに向かってレールを敷くのではなく、教材と生徒を直接関わらせ、反応を引き出すことが必要となる。授業では、生徒から多様な反応を引き出す発問づくりや、他者との交流をとおして様々なものの方に出会わせる場づくりが必要となる。

三つ目は、生徒の反応を解釈し、価値づけていく力である。生徒は、自分たちの考えや疑問の価値に気づいていない。多様な感じ方や考えが表されても、どの感じ方や考えに価値があるのか教師が明確にしなければ、拡散した授業で終わってしまう。そこで、授業のねらいを踏まえながら、教師が生徒の発言を聞き分け、価値づける力が求められる。

また、机間指導をしながら、生徒の作業状況や考えていることをつかみ、授業をどのように深めていくか、その見通しをもつ力も必要である。

四つ目は、生徒の発言を聞きながら、その発言をつなぎ、広げ、深めていく力である。つまり、生徒の反応を授業の中で組み立て、整理し、思考を深めさせていくことである。

授業の中では、生徒の発言を聞き分け、それぞれの発言を絡めながら、焦点化していくための教師の言葉や板書が重要となる。

整理すると、以下ようになる。

① どのような教材を選ぶのか	=教材を選択する力
② どのようにして生徒の多様な反応を引き出すのか	=反応を喚起する力
③ どのようにして生徒の多様な反応を価値づけしていくのか	=反応を解釈する力
④ どのようにして生徒の多様な反応を焦点化していくのか	=反応を組織する力

「自己を表現したくなる授業」をつくるうえで、必要とされる四つの力を「授業力」ととらえている。そして、この力を私たちは磨きたいのである。

教材をとおして、自分の感じ方や考えを表したくなる。そのとき、自分とは違う他者の感じ方や考えも聞きたくなる。そこに、関わりが生まれ、生徒一人一人の感じ方や考えが、さらに深まっていく。このような「考えたくなる」「聞きたくなる」「確かめたくなる」、そして、「表現したくなる」という知的好奇心に満ちた授業を、私たちはつくりたい。

一日の学校生活の大部分は、授業である。そして、このような授業をつくらうとすることが、「学校に通う意味」を生徒たちに感じさせることになると私たちは考えている。

## 5. 自己を表現したくなる授業について—生徒たちの感想に対する一考察

では、生徒の立場に立てば、どのようなときに驚きや疑問、気づきなどをもち、それを授業の中で表現したくなるのだろうか。

「表現したくなる」という言葉を、「発表したくなる」というように、わかりやすい表現におきかえながら、「授業の中で発表したくなるときは、どんなときですか」と生徒に尋ねてみた。(平成20年2月実施 対象は1年生80名)

そのときの生徒の感想を、以下のように、いくつかの観点で分類した。

(下線は筆者による)

### (1) 発問に関わること

- ・すごく興味をひく質問があって、思いや考えがいっぱい浮かんだとき、「発表したい」という気持ちになる。
- ・先生からの質問にたいして、みんなが目を付けていないようなところに自分が気づいたとき。思いが強くなって、たまらなく言いたい。みんなに聞いてほしい。 (複数)
- ・先生から尋ねられて、「これは、どっちだろう?」と迷ったとき。そういうときは、だいたい他の人もどうなのだろうと思ってしまう。
- ・いくつかの中から自分が好きなものを選ぶように言われたとき。理由もいっしょに言いたくなる。
- ・先生からの質問や友達の意見を聞いて、すごく疑問に思ったり、どうしても納得がいかなかったりするときに発表したくなる。

### (2) 自分の考えをもたせる場づくりに関わること

- ・自分の意見をはっきりもっているとき。友達の見解を聞いて「いや、私はちがう」「私も似ている」と思うとき、発表したくなる。
- ・自分の意見がはっきりとあるとき。
- ・立場が2つの分かれて、自分の立場をはっきりさせようというとき。

### (3) 机間指導に関わること

- ・書いているとき、先生と横で話をすることがあり、そのとき「いいところに目を付けたね。ぜひ発表してほしい。」と言われるとうれしくなり、言いたくなる。

### (4) 話し合いに関わること

- ・話し合いをしたあと。なぜかという、話し合いをしたあとなので、「自分と同じ意見の人がいるかな？」と少しワクワクしながら発表をしたくなる。
- ・自分も持っている意見と友達から出た意見と違うとき。そういうときは、発表したくてもうずうずする。

### (5) 聞くことに関わること

- ・友達の意見と似ているけど、もう少し付け加えたいことがあるとき。
- ・友達の発表で、目を付けたところは同じでも、理由が違ったとき。

### (6) 授業の雰囲気づくりや場づくりに関わること

- ・授業が盛り上がると、自然と発表したくなくても発表したくなる雰囲気になってくる。
- ・自分の気持ちが明るいときや楽しいとき。

生徒が「表現したくなる」動機づけとして、2年次の研究では「教材選択・発問・場づくり」をあげた。4-1と4-2で述べたとおりである。実際に生徒の感想を読むと、「すごく興味をひく質問（発問）」は、生徒にとって「考えたくなる自分の課題」に変わることがわかる。また、「迷った」とあるように、教師の発問によって、生徒自身の認識は揺さぶられ、迷い、他者の考えも知りたくなるようだ。このように「教材のおもしろさに出会わせる発問」には、4-3で述べた「反応を喚起する力」があることがわかる。

しかし、生徒が「表現したくなる」には、「教材」「発問」だけではない。(3)の机間指導や(4)の話し合い、(5)の聞くこと、(6)の雰囲気づくりも「表現したくなる」重要な要素であることがわかる。しかも、(3)(4)(5)(6)は、実際の授業の中で、生徒の反応を直接確かめながら、教師が瞬時に判断したり、聞き分けたり、生徒の発言をつないだりする力が求められる。

つまり、4-3で述べた「反応を解釈する力」「反応を組織する力」を授業の中で教師が発揮しなければ、生徒は「表現したくなる」という状況にはならないのである。「生徒の作業状況やつぶやき、発言を読み取り、どのように関わらせていけば、思考や認識が深まるのか」ということを見通す力は、「自己を表現したくなる授業」をつくるうえで必須条件であることが明らかとなった。

## 6. おわりに

情報化といわれる現在の社会の中、何が正しく、何が価値あることなのか混沌としている。そんな社会の中で、大切なことは「自分の目で見て、自分の耳で聞き、自分の心で感じたり考えたりしたこと」しか判断の基準はないということである。

それゆえ、自分が感じたり考えたりしたことを、言葉など形にしてとらえ、とらえたこ

とを表現していこうとする意欲は、子どもたちが生きていくうえで、重要な学力の一つだと私たちはとらえている。特に、自意識が過剰になり、また、反抗期などと呼ばれる多感な子どもたちにとって、自分の思いを「もう一人の自分」と対話しながら、表現していこうすることは、感じ方や考えを客観的に見つめ、自分自身の感じ方や考えに形を与えながら自分の考えを深めていく力となる。

私たちは、このような力を、授業の中で育てていきたい。教材を介して、自分自身の思いが友達の思いと絡み合いながら深まっていく授業を積み重ねたい。

しかし、このような授業は、一朝一夕にできるものではない。生徒が「表現したくなる」ものを内面をもってこそ、はじめてその目的が達成されるものである。そのために、4-3で述べたような「生きた授業技術」が必要と考えている。

「生きた授業技術」とは何か。それは、生徒が自分の感じ方や考えを表現したくなり、「何とか形にして表したい」という思いを引き出す技術ととらえている。しかし、この「生きた技術」は、ひとりでに備わるものではない。日々の授業の中で、考え、反省し、悩み、そして新たな試みをやっていく中で練り上げられていくものである。「自己を表現したくなる授業の創造」という研究主題を掲げ、教科の壁を乗り越えて、共同研究をすることの価値は、教材を選択し、他者（教材・教師・生徒）に対する生徒の反応を見抜いたり、方向づけたりするための「生きた授業技術」の習得にあると言える。

## 参考文献

- 【1】 文部科学省「平成19年度全国学力学習状況調査」調査結果のポイント  
(2007年10月)
- 【2】 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)」  
(2008年1月)